

松原朗 著

『漢詩の流儀——その真髄を味わう』

(四六判・上製・三〇六頁・
本体三二〇〇円＋税 大修館書店)



本書は、『漢詩の事典』(一九九九年、大修館書店)の第Ⅳ部「漢詩を読むポイント」の一部を、漢詩愛好者のために新しく書き改めたものである。「漢詩のテーマ」「漢詩の歳時」、「詩語のイメージ」の三章からなる。『漢詩の事典』は、詩人の伝記、詩蹟等、五部から構成される、総合的かつ高水準の事典であるが、じつは評者が漢詩教育の現場において最も恩恵を受けてきたのは、この第Ⅳ部であった。それだけにこの度、一般読者に向けて本章が一書に改められたことはまことに喜ばしい。

漢詩を読む、というのはそうたやすいことではない。一つは、外国の古典詩である以上、地域と時間の懸隔が大きいことがある。当時の読者にとって自明であった事が、已に分らないことも多い。もう一つは、詩歌の特性として、表現が凝縮・屈折しており、散文に比べて意味や論理が分かりづ

らい、という点がある。たとえば、唐代以降、詩は抒情句よりも叙景句が表現の中心を占めるようになり、王維に至っては全篇叙景というのも珍しくはない。こうした場合、その作品の主題を理解するためには、詩語の「意味」よりむしろ「イメージ」(身体感覚に基づくイメージ、連想、シンボル)を分析してゆく方が有効であろう。よい詩は、主題と無縁なイメージを用いないからである。

そして、もう一つの手掛かりが、モチーフである。これは、主題を理解させる装置のようなものであるから、主題との親近性がきわめて強い。たとえば、「登覽」をモチーフとする詩は、望郷や社会批判を主題とする傾向があり、「懷古」の詩は、人為はかなの儂さを憂う、というように。本書には、「送別」以下、二十類のモチーフが詳述されており、漢詩が何を歌い、何を歌わな

かったのか、も含めて、一読、その全貌を伺うことができる。

とはいえ、詩材については、日本の詩歌となんら変わりはない。月、雲、霞等の自然現象や、菊、楓、鶯、鹿、蟬、螢等の動植物は、和歌や俳句で見慣れたものである。しかし、本書を通じて漢詩におけるそのイメージを確認してゆくと、日中の文化の間に意外な相違のあることが分かってくる。「思婦(もの思う女性)を美しく飾り立てる」、漢詩の「螢」が、なぜ和歌では露の如き儂いものとなり、また夜啼く「鳥」が、日本ではなぜ明け方に啼くのか。こうした日中比較の視点を取り入れて、漢詩と和歌をクロスオーバーできれば、漢詩に興味のない学生たちにも新たな知的刺激を与えられるだろう。そもそも今日、日本人である私たちが漢詩を読む最大の意義は、日本の詩歌との比較によって、より深く日本の文学(日本的なるもの)を理解することにある。本書の序章「漢詩と余韻の美学」では、この点に関する新しい解釈が示されており、示唆に富む。本書を、漢詩の専門家のみならず、日本古典文学に関心をもつ人にも広くお薦めする所以である。

(井上一之・群馬県立女子大学)